

【東京】虎の門病院との連携奏功、紹介・逆紹介トップ継続-大原國章・赤坂虎の門クリニック院長に聞く◆Vol.2

「最後に残る外科医は皮膚科医ではないか」海外からも手術見学に訪れる

2025年6月18日（水）配信 m3.com地域版

大学病院や総合病院の元教授、元部長などで構成される「赤坂虎の門クリニック」（港区）。開院から7年半がたち、当初の目的だった虎の門病院との病診連携では紹介・逆紹介数ともに同院がトップを継続しているという。御年77歳の大原國章院長は現在も診療や院長業務と並行して論文・書籍執筆を行っており、自著は台湾と韓国でも翻訳本が出され、韓国では「優秀本」に。クリニック運営の現在と皮膚外科医としての活動を聞いた。（2025年4月7日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



大原國章氏（本人提供）

「皮膚外科の専門性生かしたい」病院の構想に参加

——赤坂虎の門クリニックは虎の門病院の定年が近い医師などが集まり、2017年に開院しました。大原先生が加入した経緯をお聞かせください。

私も定年が迫る中、自分の身の振り方を考えていました。個人で開業することも頭に浮かびましたが、それは自分が過去に行ってきたことの延長線上ではないと思ったんです。皮膚科のクリニックは一般的に患者さんにとって身近なにきびや湿疹、水虫などの診療を行うことが多いですが、私が専門にしてきたのは皮膚がんの手術など皮膚外科です。自分の専門性を今後も生かしたい思いがありました。

その点、こちらのクリニックでは症例によっては院内で手術ができますし、大きな手術も他院に患者さんを連れて行くことで可能です。虎の門病院から近いので、私だけでなく病院時代から診ている患者さんも通いやすい。環境的に良い条件でした。

大学病院や総合病院で教授や部長を務めてきた医師が多いという特徴は他の医師にも口コミで伝わり、中には他院を定年で辞めた元教授の先生から「ここで働きたい」と言われ、実際に入職したケースもあります。60歳を過ぎてか

らの新規開業は容易ではない一方、こちらでは勤務医と開業医を合わせたような働き方ができるので、魅力に映る人もいるのではないのでしょうか。当院の特徴として、ベテラン医師の定年後の第2の職場という側面もあるわけです。

スタッフの働きやすさ重視、院内には職員用投書箱も

——大原先生は2021年から院長を務めています。虎の門病院でも副院長を務めていましたが、組織のトップとしてはどんなことを心がけてきたのでしょうか。

職員が働きやすいクリニックでありたいと考えています。その意味で、私が院長になってからは院内に職員向けの投書箱を置きました。事務や看護師からの要望は常に受け付けていますが、対面では言いづらい人がいるかもしれないと発案した次第です。

医師間でも風通しの良さを大切にしています。常勤医は虎の門病院やその系列病院に勤めていた医師で互いに顔見知りだったため、以前から診療科間の連携は比較的良好だったと思いますが、環境面でも当院の医師専用スペースは壁がない仕様で、非常勤を含めて専門の異なる医師たちが交流しやすいレイアウトになっています。そもそも、教授や部長としてさまざまな経験をし、いろいろな人と接してきた人たちですから、互いを尊重しながら協力して診療する形を築きやすいのかもしれないです。

——当初の目的だった虎の門病院との病診連携はうまくいっているのでしょうか。

紹介数・逆紹介数ともに当院が最も多い状況が続いており、虎の門病院では近年、外来患者数を減らしているといっているので、一定の効果はあったと思います。

領域ごとの連携でいえば、黒澤和宏先生が担う泌尿器科では特にうまくいっていますね。黒澤先生が虎の門病院泌尿器科の部長ととても良好な関係を築いており、病院で手術した人を当院で診ていくシステムがほぼ確立しています。こうした好例をさらに広げていけないか検討しているところです。

自著「大原アトラス」は台湾や韓国でも高評価

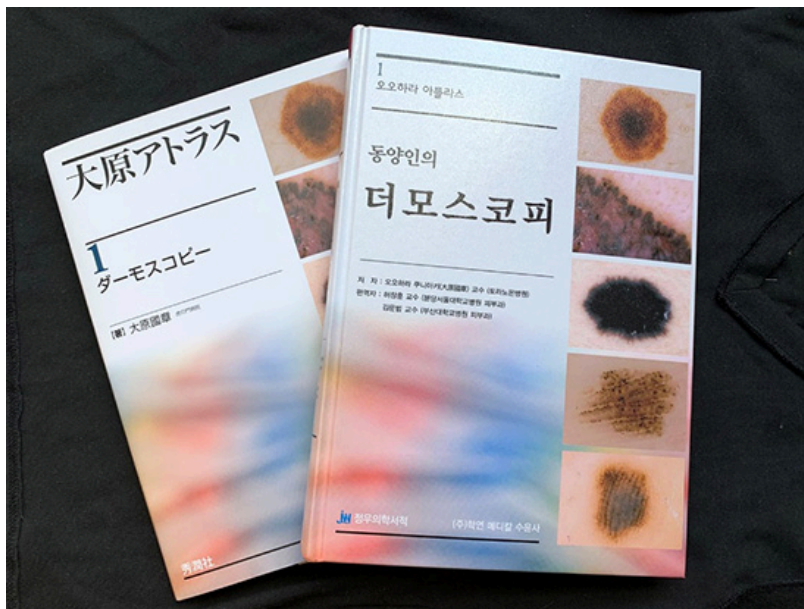
——大原先生はこれまで、論文・書籍の執筆や学会発表も積極的に行ってきたと聞きます。

論文や書籍は本当にたくさん書いてきました。医学雑誌に書いた総説や症例報告の論文は900以上あると思います。以前はパソコンに一覧表のデータを作って雑誌への投稿ごとに更新していましたが、頻度が多く途中からやめました（笑）。

書籍では、代表作である「大原アトラス」シリーズの第6弾がこれから出版されます。同著は私が担当した症例の臨床・病理・手術アトラスであり、術式選択のポイントや治療経過を豊富な写真とともに紹介しています。これは国内だけでなく台湾と韓国でも翻訳本が出ており、台湾の医師によると、第1弾は現地の皮膚科医の半数以上が持っていると聞きます。また、韓国では公的機関から出版年度の国内優秀本に認定され、全国の公的図書館に配布されました。日本発の専門書が韓国で評価されるのは、政治状況などを考えると珍しいことではないのでしょうか。

——日ごろの診療や院長業務に加え、学術的な活動も並行して行うのは労力が要と思います。

自分が経験してきたいろいろなデータを無駄にせず、公表することによって皆さんの勉強の役に立ちたい、それが私の願いです。臨床写真や病理写真は全て自分で撮っており、かなりの時間と労力を費やして整理しますが、苦にはなりません。体系だった本があれば速やかに情報を得られますよね。いろいろな文献を調べ、方々の人に聞いて回ってやっと知るのに比べて圧倒的に効率がいい。それがひいては、医師だけでなく患者さんにも還元されます。医師として、後進・後世に役立ちたい思いです。



「大原アトラス1」とその韓国語版（本人提供）

——大原先生は2025年で77歳になりました。最後に、クリニックの院長ならびに医師としての展望をお聞かせください。

クリニックの展望としては、より一般の人への認知度を高めていきたいです。患者さんは相応に増えてきましたが、診療領域の広さに比べてまだ十分とは言えないため、当院の理念である「患者さん中心の医療を志し、経験豊富な医師とスタッフによる質の高い、ぬくもりのある医療を提供します」を根幹にしつつ、情報発信を含めた周知活動も引き続き行っていきます。

医師個人としては、健康である限り現役であり続けたいですね。とはいえ、自分の気持ちとスタッフから見た客観的な判断は違うので、引き際を見極めることも大切でしょう。

外科の領域は内視鏡や手術支援ロボットの発達などにより、医師が自ら切って縫う時代ではなくなりつつあります。しかし、皮膚外科は皮膚の表面を扱うので医師の手技が依然として重要です。個人的には、最後に残る外科医は皮膚科医ではないか、とも感じています。私の元には東京大学や開業医の先生、フィリピンなど海外の医師も手術の見学に訪れています。見たい人はいつでもウェルカム。興味のある先生はご連絡ください。

◆大原 國章（おおはら・くにあき）氏

1973年東京大学医学部卒。東京大学医学部附属病院を経て、1984年虎の門病院皮膚科部長。2007年同院副院長。2017年赤坂虎の門クリニック皮膚科、虎の門病院特任部長、インドネシア大学連携教授。2021年赤坂虎の門クリニック理事長、院長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

